

2020年7月NHK東北地方放送番組審議会

7月のNHK東北地方放送番組審議会は、16日(木)、NHK仙台拠点放送局において、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、東北ココから「withコロナ 食から広がる暮らしの変革」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、8月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

- | | |
|-----|---------------------------------|
| 委員長 | 坂田 裕一 (NPO法人いわてアートサポートセンター 理事長) |
| 委員 | 丑田 香澄 (一般社団法人ドゥーラ協会 理事) |
| | 桂木 宣均 (日本地下水開発(株) 代表取締役社長) |
| | 佐藤勘三郎 ((株)ホテル佐勘 代表取締役社長) |
| | 鷹山ひばり (七戸町立鷹山宇一記念美術館 館長) |
| | 南條 和恵 (仙台大学柔道部女子監督) |
| | 西内みなみ (桜の聖母短期大学 学長) |
| | 宮川 宏 (河北新報社 論説委員会副委員長) |
| | 八代 浩久 (東北電力(株) 取締役 常務執行役員) |

(主な発言)

<東北ココから「withコロナ 食から広がる暮らしの変革」

(総合 7月10日(金)放送) について>

- 食という身近で多くの人にとって関心のあるテーマを扱いながら、今後の地域づくりのあり方まで踏み込んだ内容で見応えがあった。仙台市内にある居酒屋を中心に生産者と消費者がつながった事例は、新しい循環をつくる取り組みになるのではないかと思った。東北の食材を扱う通信販売のサイト運営代表の高橋博之さんが「食材の値段以外の判断基準が大事だ」ということばが印象的だった。リモート出演したゲストで環境ジャーナリストの枝廣淳子さんの話は、東北の地域経済の今後を考える上で、非常に示唆に富んでいた。スタジオゲストとして出演した財団法人AuBléss代表の丹治奈緒子さんが、今後の東北の地域づくりについて話していたが、示唆に富む内容でよかった。

- 新型コロナウイルスの感染拡大で大変な状況の中、人とのつながりで暮らしを豊かにする方策を考える内容でとてもよかった。番組のテーマが画面の右上に表示されていたが、もう少し大きい方が見やすかったのではないか。持続可能な地域社会をどう作っていけばいいのかというゲストの枝廣さんの話は分かりやすかった。居酒屋で野菜を売る取り組みを紹介していたが、もともと地元の野菜だけを扱っていたのかなど、背景をもう少し説明してほしかった。新型コロナウイルスの影響でこれまでの販路が失われる中で、通信販売を行うことで助かったという話題があったが、今後はどうしていくのかという部分にまで踏み込んでほしかった。

- 生産量や漁獲量の少ない食材を地域で流通させるのはとても難しい。今回取り上げた居酒屋で野菜を販売する取り組みは一つの方法だと思うが、売り上げとしては小規模なビジネスで、今後持続できるのかなど問題もある。ただ、単に野菜を売るだけではなくて、食べ方、調理方法を提案しながら販売していた点はよかったと思う。生産者と消費者を結びつける通信販売については利点もあるが、課題もあると思うので、もっと深めて取材してほしかった。ゲストのコメントは分かりやすかったが、もう少し具体例を挙げてほしかった。リモート出演されたゲストの声が不明瞭だったので、もう少し工夫してほしかった。

- 通信販売のサイトを運営する高橋さんが、「顔が見えると作る側もいいものを作ろうという気になる」ということばが印象に残った。また、地元のいい食材が東京などに出荷されてしまい、地元で手に入らないという話には驚いた。人口だけではなく、食材も都市に集中している現状がよく分かった。ただ、前半の居酒屋での野菜販売、そして通信販売での取り組みのVTRは慌ただしく感じ、印象に残りにくかったのではないか。ゲストの枝廣さんの話はとても分かりやすかったが、リモートの音声と映像が不鮮明で残念だった。ゲストがいる地域の放送局のスタジオを使うなど工夫はできないのかと思った。

- 居酒屋での野菜販売や地場産品の通信販売など、生産者と消費者の間にこれまでなかった価値観や利便性を入れてつなぐことによって苦境を乗り越えようという取り組みが紹介されて素晴らしい内容だった。新型コロナウイルスの影響下でやむを得ず行われたことだったかもしれないが、大量生産、大量消費、都市への人口集中など、現代社会の構造の問題が浮き彫りになった形だと思った。生産者と消費者をつなぐプラットフォームがこれからの地域経済の活性化に大きな役割を果たしていくと感じた。東北の未来、地域社会の在り方を鋭く問う充実した番組だったので続編も期待している。

- リモートの画質と音声が悪かったが、司会の真下貴アナウンサーがパネルを使ってゲストのコメントを解説していたので、とても分かりやすかった。宮城県の七ヶ浜漁港にレストランのシェフが訪れて、地元にも魚介類を卸してもらえるように話す場面で、漁業協同組合側も「もっとこういう機会が増えるといい」と話していたのが印象的だった。顔が見えない消費者に売るだけではなく、地元で信頼関係のある相手に販売できることのよさがあると思う。地域で経済を回していく手立てをさらに深く掘り下げて番組にしていってほしい。生産者と地元の消費者のつながりが分かるいい番組だった。

- 食を通した暮らしの変革というテーマで、目新しさはなかったが、その土地でとれた食材をその土地で消費することをもっと広めていくために必要な番組だったと思う。ブランド化されたものや見た目のいいものが高価に取り引きされることも多いが、地元で作られた食材の良さを理解して購入する意識を根づかせたほうがいいのではないかと思った。都市部に全てが集中していると、新型コロナウイルス感染拡大の影響で苦しい状況になると経済の不安定を招く。やはり地元でしっかり買い支える仕組みも必要だと思う。せり農家の三浦さんが「注文がないとあなたは世の中に必要とされていないという感覚になる」ということばが印象に残った。

- ゲストの枝廣さんの「買い物は投票だという意識を持って、自分が応援したいものや作り出したい未来につながるものにお財布を開く」というコメントが印象的だった。視聴者の意識に訴えかける内容でよかったと思う。消費者が果たせる役割が買い物以外にもあるのか、具体的に示してもらえるとさらによかったと思う。事例の紹介もバラエティ豊かで、前向きに取り組む人が次々と登場し見応えがあった。リモートで出演したゲストの音声には、テロップをつけて分かりやすく視聴者に届けようという姿勢を感じた。今回の番組のテーマは「つながる」だったが、消費者が買い支えることを越えて共に歩むことにも目を向けた番組を期待している。

- 東北では、地産地消という考え方は以前から課題になっていて、さまざまな取り組みが進んでいると思う。東日本大震災を経て、さらに今回の新型コロナウイルス感染拡大の影響下で、より生産と消費、流通の課題が鮮明になったと思う。枝廣さんの話は非常に分かりやすかったが、リモート出演ということで空気感が若干違って見えたのが残念だった。どうすれば防げるのか、リモートの課題だと思う。ゲストの2人の役割をもう少し明確にしてもよかったと思った。具体的な取り組みの紹介に加え、地域の課題は何なのか、視聴者に投げかけてもよかったのではないか。

- 農業や漁業者、飲食業の方々が苦境に立たされていることはわかっていたが、地域

での循環という視点で考えたことがなかったので、大変勉強になった。番組構成も分かりやすく、新型コロナウイルスの影響によって浮かび上がってきた課題が見えてきた。消費者という立場で何ができるのか、生産者の思いを知り、値段以外の判断基準を得るといふ新しい視点を得られてよかった。また、良質な食材ほど県外に行く、地元の食材を地元のレストランで使うことがかえって困難な時代になっているということにも驚いた。ゲストのコメントは分かりやすかったが、もっと具体的な地域の課題や可能性の話も聞きたかった。

(NHK側)

VTRに登場した居酒屋では、元々、地元の生産者の野菜をメインに扱っていて、今回は卸業者の方の協力も得ながら野菜の直売を行った。生産者、卸業者、飲食店みんなで苦境を乗り越えるために考えたものだった。リモート出演したゲストの音声と画質がよくなかったことについて、インターネットの接続環境の影響だった。今後もゲストのリモート出演は続くと思うので、こちらから機材を送って使用してもらうなど、改善策を探っていきたい。頂いた意見は、今後の番組制作にいかしていきたいと思います。

<放送番組一般について>

- 「もりすた」を見ている。昼の時間帯の10分間という番組なので、家事をしながら見ている人が多いと思う。そういった意味で、仙台市中央卸売市場の魚介類や野菜の紹介などのコーナーは、気軽に見られて役に立つ内容だと思う。また、さくさくレシピというコーナーも献立の参考になっていいと思う。東北風景印めぐりというコーナーもすばらしい。郵便局のある地域の風景や名所が描かれた風景印を紹介しているが、初めて知る情報も多く興味深い。
- 6月19日(金)のやまコレ「大集合！歴代山形局アナ オンライン飲み会」を見た。山形局の中谷文彦アナウンサーが司会で、初任地が山形局の伊藤海彦アナウンサー、橋詰彩季アナウンサー、中原真吾アナウンサーの3人が登場した。新人時代の初々しい映像や失敗談、苦労したことが語られ、アナウンサーをより身近に感じることができた。「山形での経験が今に生きている」というコメントがよかった。アナウンサーが地域に対する思いを語る内容はおもしろく、NHKがより身近な存在に感じられる企画でよかった。

- 7月3日(金)「やままる」で、田んぼの真ん中からのレポートがあった。周りに誰もいない中でマスクをしていて違和感があった。NHKではどのような基準をもっているのか。

(NHK側)

新型コロナウイルス感染防止対策については、全国的に基準を設けて行っている。取材する方との距離感やマスクの着用、手などの消毒などはもちろんだが、状況に応じた形で対策を行うように改めて進めていきたい。

- 6月20日(土)のNHKスペシャル「新型コロナと水害危機～あなたは命をどう守る～」を見た。災害時に避難所で新型コロナウイルスの感染防止対策をどうするかという点について、さまざまな例を取り上げて分かりやすく伝えていた。課題が多く、避難所での対策が難しい状況だということがわかった。また、現在進められている予報技術の実証実験も取り上げられていた。早めの避難勧告などに結びつけられた事例もあるそうだが、実際の災害に役立てるまでには時間がかかるということだった。水害はいつ起こるか分からないが、予報技術や自治体の対策が追いついていない状況に不安を覚えた。
- 6月28日(日)のNHKスペシャル「戦国～激動の世界と日本～(1)「秘められた征服計画 織田信長×宣教師」と7月5日(日)の(2)「ジャパン・シルバーを獲得せよ 徳川家康×オランダ」はとてもおもしろかった。戦国時代の日本は、世界に比べて遅れていたと思っていたが、世界の覇権をめぐる攻防の真ただ中にいたことが番組でわかった。新たな歴史観に触れることができ大変興味深かった。
- 7月12日(日)のNHKスペシャル「豪雨災害 いま何が必要か～命を守る“避難スイッチ”～」を見た。時宜を得たな情報が多く引きつけられた。いつどこで水害が起きてもおかしくない、今後、今までに経験したことがない豪雨になる可能性が高いことがよく分かった。なぜ避難しなかったのかというインタビューに「そのときは雨が降っていなかったから」と答えた被災者のことばが印象に残った。短時間で逃げられない状況に追い込まれる可能性もあり、その恐ろしさが伝わってきた。予報技術も進歩しているので、気象情報を伝えるアプリなども活用しながら防災について考えていきたいと思った。
- 連続テレビ小説「エール」を見ている。このドラマの魅力はたくさんの歌が登場することだと思う。森山直太郎さん、柴咲コウさんなどのプロの歌手として活躍してい

る出演者や、山崎育三郎さん、古川雄大さんなどのミュージカル俳優も出演し、懐かしい曲が歌われる。特に年配の方たちに元気を与えているのではないか。また、「船頭可愛や」が、さまざまな場面で登場し、この曲のオリジナルを知らない世代でも、自然と口ずさみたくなるような演出でよかったと思う。

- 6月11日(木)のクローズアップ現代+「バッシングから再起“感染の現場”その後 訴え・葛藤と決意」、6月24日(水)「新型コロナ 元感染者たちの告白」、6月30日(火)「密着・生と死の現場家族はそのとき…葛藤…重い決断の先に」を見た。どの番組もすばらしい取材力だと思った。共通していたのは、いつ誰にでも起こる可能性があることを題材にしていたことだ。自分が感染したとき、自分の組織から感染者が出たとき、家族が感染者になったときどうするか、経験した人の取材が丹念にされていたので、とても参考になる内容だった。
- 6月22日(月)のファミリーヒストリー「柳葉敏郎～亡き父が描いた絵 明らかになった事実～」(総合 後 7:30～8:42)はとても感動する番組だった。柳葉さんの父親が描いた絵をあらゆる人に連絡して探し出す様子や柳葉さん自身も知らなかった実の姉の存在が発覚するなど、本当に感動的なドキュメンタリーだった。インターネット上でも話題になっていて、これまで「ファミリーヒストリー」を見たことのない若い層が知るきっかけにもなったのではないか。人に家族あり、歴史あり、命の連鎖に思いをはせるひとときになった。
- 6月24日(水)の病院ラジオ「あの子どもどうしてる？スペシャル」(総合 後 7:57～8:42)を見た。登場した子どもたちの個性が豊かで、明るく前向きに生きている様子が伝わってきた。病気に向き合い、日々闘いながら生きている姿に感銘を受けた。家族の子どもに対する愛情の深さや絆の強さもよく伝わってきた。お笑いコンビのサンドウィッチマンの2人が自然体で子どもたちに接しているのも好感が持てた。決して深刻ぶることなく、笑いにできるところは笑わせてくれる、2人の人柄をうまく生かした番組だった。
- 6月27日(土)の「NHKだめ自慢～みんながでるテレビ～(1)」はとてもいい番組だった。リモートで就職活動をしていた大学生の面接の時の失敗談など、人に伝えたいようなおもしろい話が多かった。人の失敗やだめな話は、他の人に勇気を与えたり、ほっとさせる力があると思う。
- 7月4日(土)のSONGS「郷ひろみ 日本を元気に！スペシャルメドレー」を見た。郷さんの魅力がとても分かる内容だった。ファンでなくても引き込まれて見るこ

とができた。どの歌もすばらしく、元気をもらえる番組だった。

- 7月5日(日)の目撃！にっぽん選「和解の島～ハンセン病 対話の先に～」を見た。世界中で差別に対して敏感になっているこの時期に放送されたので、タイミングがとてもよかったと思う。また、美談で済ませていない点もよかった。ハンセン病の方々が持っている複雑な思いを考えると和解は簡単ではなく、それをストレートに出していてよかった。さらに、差別が差別を生むという部分もうまく描いていたと思う。三浦大知さんの語りも非常によかった。
- 7月5日(日)駅ピアノ「ロサンゼルス v o l . 3」(総合 後4:15～4:30)を見た。ナレーションや音楽がなく、現場の雑踏の音だけでその場にいるような気持ちになれる番組だ。ピアノを演奏した人の詳しい情報はテロップで紹介され、演奏後のインタビューから生い立ちや暮らしぶり、曲にこめた思いが伝わってきて感動的だ。
- 7月8日(水)歴史秘話ヒストリア「ペスト 最悪のパンデミック」を見た。14世紀にヨーロッパで3,000万人以上の命を奪ったペストがどのように流行し、どのように克服していったのかがよく分かった。ペスト菌を発見した医学者の北里柴三郎が、日本での感染拡大をどのように抑えていったのかもよく分かった。今の新型コロナウイルス感染拡大と対比し、感染症と闘うヒントを提示するととてもいい番組だった。
- 6月27日(土)のE T V特集「すべての子どもに学ぶ場を～ある中学校と外国人生徒の歳月～」を見た。外国人労働者の子どもが義務教育からこぼれ落ちているという問題に焦点を当てていた。今後、全国各地で外国人が増えていく可能性があり、人種も文化も異なる人が暮らす社会をどのようにつくっていけばいいのか深く考える機会になった。また、この問題について、各自治体の裁量に任せてよいのか、国として取り組む必要があるのではないかという提言もありとてもよかった。もっと多くの人が見る時間にも放送してほしいと思った。
- 6月28日(日)日曜美術館「ようこそ！ 私たちの美術館」を見た。3つの美術館を取り上げていたが、京都市の美術館の青木淳館長のことばが非常に印象に残った。「美術館は層の重なり方が重要。ある時代の層と今の時代の層をどう重ね合わせるができるかということ」など、美術館の在り方を考える上で示唆に富む話が多く参考になった。
- 6月28日(日)のサイエンスZERO「日本の“お家芸” サンプルリターン 世界初！火星の月探査へ」は、科学が苦手な人にも分かりやすい内容だった。火星の衛星

のサンプルを採集するためのプロジェクトについて取り上げていた。はやぶさ2でサンプルの採取に成功したが、今回はもっと難しいと言われている。宇宙のなぞに迫るこの取り組みの意義、私たちの生活にどのように役立っていくのかなど、より身近に感じられるような紹介でとてもよかった。

- 7月4日(土)のE T V特集「世界コロナ“闘稿記”～変わりゆく家族のカタチ～」は、SNSに投稿された映像で構成されたていた。新型コロナウイルスの感染拡大によって家族の関係が変わり、今後どうなっていくのか、赤裸々に描かれていて、胸にくるものがあった。7月12日(水)ニュース シブ5時「S P 新型コロナ日記」(総合 後5:16~6:00)も一般の人が自撮りした映像が使われていた。柔らかいトーンで作られていて、ほっとする雰囲気だった。2つとも新しい番組の作り方だと思う。新型コロナウイルスの感染拡大が続く状況下で、苦しみながらも前向きに生きている姿を見せることも報道の一つの在り方だと思う。

- 6月18日(木)の偉人たちの健康診断選「独眼竜・政宗 水もしたたる伊達(だて)男」を見た。伊達政宗がかなり健康に気がついていたことがわかった。徳川家康に負けないように長生きすることが目的で、戦国の武将たちは、戦いだけではなく健康面でも競っていたのかと思った。伊達政宗がやっていた健康法は、適度な運動や水を小まめに取ることなどだった。普通のことだが、それをきちんと続けていたということから優れた人物像が見えてきた。精神面にも気を配っていたという話もあり、現代の私たちにとっても参考になる情報が多かった。

NHK仙台拠点放送局
番組審議会事務局